

98 経験機械

約束された幸福は幸福だろうか？

ロバートは同意書を前にして座り、この二時間ずっと悩んでいたが、それでもまだ、サインすべきか破り捨てるべきか、わからなかった。迷っているのは、ふたつの将来のどちらを選択するかだ。

ひとつ目の将来は展望が暗く、夢を実現できる見こみは薄い。ふたつ目の将来は、有名なロックスターとして永遠の幸福が保証されている。選ぶまでもない、と思えるかもしれない。ところが、ひとつ目の人生は現実世界のもので、ふたつ目の人生は、すべて「経験機械」の中でのものなのだ。

この機械を使えば、人生をまるごと仮想現実で送ることができる。そこでのあらゆる経験は、より幸福でより満足できるものに、あらかじめ設定されている。しかし、ここが重要なのだが、いったん機械に入ってしまうと、自分が現実世界にいないことには気づかず、自分の身に起きる出来事が、みずからの望みに沿うよう設定されていたことにも気づかない。まるで、ふつうの世界でふつうの人生を生活しているようなものである。

のだ。ただ、この人生では、何もかもがうまくいくように思えるため、人生の勝者でいられる。

いったん機械に入れば人生は薔薇色だ、とロバートにはわかっている。しかし、それでも、どこかまやかしのような感じがして、天国へ連れていってくれるはずの書類にサインするのをためらってしまうのだ。

ロバート・ノージック「アナキー・国家・ユートピア」
国家の正当性とその限界／嶋津格訳／木鐸社／一九九二年

ロバートがためらっている理由は容易にわかる。機械の中の人生は、インチキでごまかしの非現実だからだ。しかし、幸福や不幸が無慈悲に繰り返される本物の人生のほうが、インチキだが幸せな人生より、なぜよいと決まっているのだろうか？

決まってない、と幸福を約束するこの機械の販売員なら、力説するだろう。まず、「本物」や「現実」がどういう意味かを考えてみたい。ある人物が本物であるというのは、誰かのふりをしていない、ありのままのその人ということだ。しかし、ロバートは機械の中にも、変わることなくロバートだ。外にいたときと同じくらいやすく、ありのままの自分でいられる。

とはいえ、現実世界でロックスターになるには実力が必要だが、機械の中では自分自身の努

力が報われてロックスターになるわけではない、という反論があるかもしれない。それなら、ロックスターの歌を聴いてみる、と言いたい。才能などほとんど関係がない。運とチャンスがすべてだ。機械の中のロバートが手にする名誉は、ポップ・ミュージック界の狭い階段を上っていく若者が手にする名誉と比べて、なんの遜色もない。実際、それが経験機械のいいところかるべき両親のもとに生まれたかどうか。授かった能力が、自分の属する社会で評価され、報いられるかどうか。頭角をあらわす力になってくれる人物や場所へのつてがあるかどうか。確かに幸せになれる方法があるのに、自分を幸運の女神の手にゆだねるなんて、どうかしている。現実世界を捨てる誰かが言えば、わたしたちはこう論ず。現実的になれ、と。しかし、今わたしが暮らしているこの世界といえども、自分が見たもの、聞いたもの、感じたもの、味わったもの、触れたもの、匂いをかいだもの、といったわたしの経験の寄せ集めにすぎない。ものと思うのなら、現実という概念を見なおす必要があるかもしれない。なにしろ、経験を越えた科学の世界などといっても、結局それは観察や経験にもとづいたものであり、すべて経験世界の内側にあるのだ。だから、ある意味では、現実はその外観にすぎない。それでもまだ、わたしたちは機械に入りたくないと思うかもしれない。というのも、自分の

将来は、できるかぎり自分自身の意志や努力で決まるべきだからだ。その思いにこだわって機械に入るのを拒むとしたら、少なくとも、これだけはいえるはずだ。つまり、わたしたちは、自分にとって何が最善かを考えるとき、ただ幸福になりさえすればいいと思っっているわけではない。そうでなければ、すぐさま経験機械に身をゆだねるはずだから。

「参照」1…邪悪な魔物 20…幻想を破る 51…水槽の中の脳 82…悪夢のシナリオ

99 平和の代償

犠牲者の数だけが問題なのか？

その使者は、ヒトラーによって極秘裏にイギリスへ送りこまれていた。使者が伝える取引の内容を、万一、イギリス側が公表しようとしたら、ベルリン側は、使者に関する情報をすべて否定し、当人を売国奴として弾劾するだろう。けれども、あきらかに、それは必要なさそうだ。チャーチルがその取引を拒否できるとは思えないからだ。